

水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/index.html>

第 2 報
千葉県農林水産部
平成28年6月3日

中干しの適期実施を！

「ふさおとめ」の幼穂形成期は6月14日頃からと予測

[生育概況]

気温は平年並から平年と比較して高い傾向が続き、生育は平年よりやや早くなっています。ただし、植付直後に強風や一時的な低温にあったほ場では、生育差が見られており、平年と比較して、草丈がやや低く、茎数がやや少なくなっています。

表 1 品種別の生育状況（6月1日現在）

品種	植付時期	平年比※			
		葉令の進み	草丈	茎数	葉色
ふさおとめ	4月20日頃	やや早	やや高	やや多	並
ふさこがね	4月20日頃	やや早	並	やや多	並
コシヒカリ	4月20日頃	やや早	並	やや多	並
	5月1日頃	並	やや低～並	やや少～並	並
ふさのもち	4月20日頃	やや早	並	やや多	並
	5月10日頃	並	並	並	並

※平年比は過去10か年（2006～2015年）の平均値との比較。

ただし、ふさのもちは過去6か年（2010～2015年）の平均値との比較。

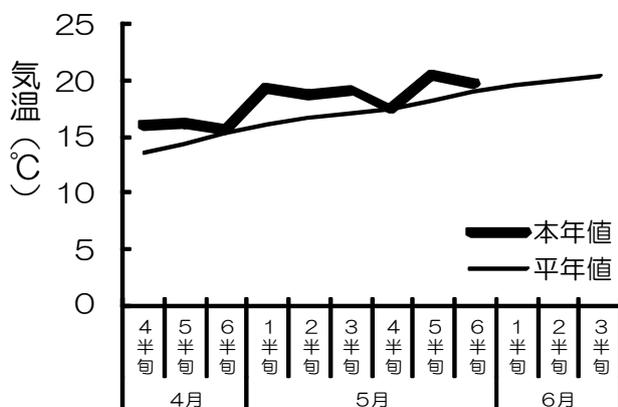


図 1 日平均気温の推移（アメダス、佐倉）

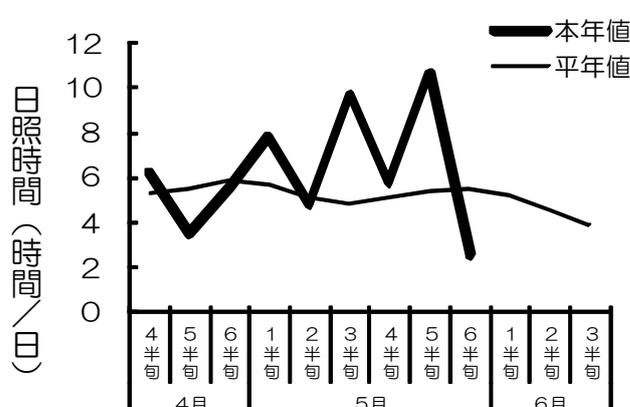


図 2 日照時間の推移（アメダス、佐倉）

[これからの管理のポイント]

■ 中干しの実施

中干し開始時期の目安及び中干し開始目標茎数は表2、3のとおりです。中干し開始目安を過ぎていて、中干しを実施していないほ場では、速やかに中干しを開始しましょう。排水しにくいほ場では、中干し開始数日後に溝切りを行うと効果的です。

なお、強風などの影響を受けたほ場では茎数が少ないほ場も多く、浅水管理等で分けつを促す必要があるなど、生育の差が大きいため生育状況を確認しましょう。

表2 品種別の中干し開始時期の目安

品種	植付時期	6月1日現在の茎数(※1)	中干し開始時期の目安(※2)
ふさおとめ	4月20日頃	471本/m ²	既に、中干し開始目標茎数に到達。
ふさこがね	4月20日頃	428本/m ²	既に、中干し開始目標茎数に到達。
	5月1日頃	—	6月10日頃
コシヒカリ	4月20日頃	447本/m ²	既に、中干し開始目標茎数に到達。
	5月1日頃	349本/m ²	既に、中干し開始目標茎数に到達。
	5月10日頃	—	6月20日頃
飼料用米(アキヒカリ)	5月15日頃	—	6月20日頃 } 中干しは、茎数増加に影響しない程度に実施。(収穫時、大型機械がスムーズにほ場に入れるようにする)
飼料用米(夢あおば)	5月15日頃	—	

(※1) 水稻作柄安定対策調査結果の複数地点の平均値

(※2) 中干し開始時期の目安は、水稻作柄安定対策調査結果及び品種別の生育状況(表1)を参考に推定した。中干し開始に当たっては、ほ場の茎数を確認し、中干しを実施する。

表3 品種別の中干し開始目標茎数

品種	植付時期	砂質	壤質	粘質
ふさおとめ	4月20日	480本/m ² (27本/株)	480本/m ² (27本/株)	440本/m ² (24本/株)
ふさこがね	4月20日	360本/m ² (20本/株)	360本/m ² (20本/株)	360本/m ² (20本/株)
コシヒカリ	4月20日	320本/m ² (18本/株)	310本/m ² (17本/株)	300本/m ² (16本/株)
	5月1日	(18本/株)	(17本/株)	(16本/株)

※()内は60株/坪植えの時の1株当たり茎数の目安。

※極端な疎植の場合はこの目標茎数に達しないことがある。

■ 幼穂を確認し、入水と穂肥の準備

4月20日植えの「ふさおとめ」は、平年と比較して3日程度早い6月14日頃から幼穂形成期(幼穂長1mm)となる見込みです(表4)。

穂肥は、表4の幼穂形成期予測日頃から幼穂の観察を行い、適期に実施しましょう。

「ふさおとめ」は穂肥が遅れると玄米中のタンパク含量が増加し、食味の低下を招くので、穂肥は幼穂形成期(出穂前25日)～出穂前18日(幼穂長が1mm～10mm)に施用しましょう。施肥量は、砂質土や壤質土では窒素と加里を10a当たり成分量で各3kg、房総南部の粘質土では1～2kgが目安です。

表4 品種別の幼穂形成期の予測

品種	植付時期	幼穂形成期予測（月日）			
		県北 （成田市）	九十九里 （茂原市）	内湾 （千葉市）	県南 （館山市）
ふさおとめ	4月20日	6月17日～	6月15日～	6月14日～	6月14日～
ふさこがね	4月20日	6月18日～	6月16日～	6月15日～	6月16日～

※幼穂形成期予測システム（H24 千葉県試験研究成果普及情報）を基に予測。

■イネクロカメムシ防除

被害を最も受けやすいのは分けつ期です。この時期にイネクロカメムシが水田に侵入すると、8頭/株で収量が3割減少するとの報告があります。

イネクロカメムシは日中には株元に生息することが多いことから、畦畔近くの株を中心に、被害株やその周辺の株元を注意深く観察し、発生が多い場合は薬剤防除します。

防除薬剤はスタークル/アルバリン粒剤など、稲が薬効成分を吸収し、稲体に行き渡ることによって高い防除効果が得られる剤を用いましょう。



写真1 イネクロカメムシ成虫（体長8～10mm）



写真2 葉における黄白色斑点状食害痕
（農林総合研究センター病理昆虫研究室）

■飼料用米の穂肥と防除の実施（多収品種の管理のポイント）

多収品種（専用品種）で多収を実現するためには、収穫時まで肥効を継続させ、葉色を濃く推移させることが基本です。

穂肥は、出穂前30～20日に行います。5月15日頃に植付けたほ場では6月下旬頃になります。ただし、最高分けつ期に葉色が低下した場合は減収するので、すぐに窒素を追肥します。追肥の目安は、窒素を10a当たり3kgとし、単肥を利用するなどコスト低減を心がけましょう。

なお、飼料用米でもカメムシ類をはじめとした病害虫防除は適切に実施しましょう。

次回の「水稻の生育状況と当面の対策」は、6月17日に発行予定です。